

書評

●草場 鉄周(北海道家庭医療学センター)

医師アタマ

医師と患者はなぜすれ違うのか?



編集：尾藤 誠司

A 5 頁 220 2007 年

定価 2,310 円(本体 2,200 円+税 5%)
[ISBN 978-4-260-00404-6]医学書院刊

爽快な本である。それが第一印象。今まで理論武装や文献による裏付けに基づいて、系統的に同様のテーマを扱った本や論文を読むことはあったが、この本のように、現場でまさに日々働いている医師が、真摯に日常の診療を見つめ、一気呵成に論を展開したものは初めて手にした気がする。それゆえに、同じく現場で迷いながら働いている一人の医師としては、実に共感しやすく気持ちがよい。

本書では、「異文化コミュニケーションとしての患者—医師関係」という一貫したテーマの中で、そのコミュニケーションのずれの多くは医師独特の思考様式にあると指摘。それを「医師アタマ」と表現しながら、「健康とは?」「診断とは?」「医療におけるよいことは?」「医療は本当に役に立っているのか?」という、およそ医療の基本命題のすべてといってよい多岐にわたるテーマを「医師アタマ」の視点で見つめ直す作業を約 200 頁にわたって繰り返している。無論、こうしたテーマに関して、それぞれの筆者によって提示された判断は微妙に異なり、それもまた自然と医師アタマを読者に理解してもらおう材料となっている気がする。

『バカの壁』(新潮社)の著者である養老孟司は

著書『唯脳論』(筑摩書房)の中で、現代文明は人間の脳が持つ認識パターンを人工物や制度・システムで構築した世界であり、実は脳の表現型に他ならないと説明する。そして、文明以前から存在する自然界、人間の身体そのものと不調和をきたす定めにあると論じている。翻ってみると、世界の不調和の多くは、化石燃料使用による地球温暖化、国境線の設定による紛争など、脳がもたらした災厄に他ならない。われわれ人類の発達した脳がなければ、密林で群れをなすチンパンジーやオランウータンのように、悩みは少なく、自殺も存在し得なかったであろう。ただ、現実を否定することはできない以上、われわれはこの脳をもって問題を解決せざるを得ない。まさに、毒をもって毒を制す、である。

医師アタマについても同様であろう。医師アタマを避けることは難しいし、突き詰めるヒボクラテス以来の現代医療を否定せざるを得ない。ただ、この本の中では、自らの診療態度を省察し、自分の医師アタマを発見して、それと認識することを一つの解決策として提示している。その限界を意識しながら、医師としてふるまい、同時に患者が固有の論理と生活背景を持っていることを忘れないということである。

日々診療する中で、これを実践し続けることは容易なことではない。いちばん困難なことは自分自身の医師アタマを見つけることである。私はグループ診療を通じた日常診療の振り返りのプロセスが最も効果的と考えているが、現実的にこうした環境を作ることができる医師は少ないだろう。そうした方にとって、この本は一つの重要な材料になるであろう。一人でも多くの医師に、医師アタマを見つけてもらいたい。それは日本の医療に少なからずよい影響を与える予感がする。